

---

# 明日に祈る

翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

明日に祈る

### 【Nコード】

N4454A

### 【作者名】

翠

### 【あらすじ】

「あいっ」は・・・冴えない少年<sup>アキラ</sup>輝が夏休み一週間前、転校生にかけられた一言。「貴方も同じ。」それはどうゆう意味なのか。ひと夏の間に輝に何かが起きた。

## あの日（前書き）

いきなり二作目にして連載を作ってしまった。  
頑張つて、書いていきたいと思いますので、読んで頂けると嬉しい  
です。

## あの日

目に映るのは闇。

蒼く、深く、冷たく僕を包んで……。

この闇が僕は嫌いじゃない。

冷たくも、温かい。

ここはどこなんだろうか？

僕の中の闇か。それとも外の世界の闇か。

どっちにしろ、ここは居心地がいい。

ずっとこの闇に包まれていたい……。

そう願っていたのはいつだっただろうか。

今となっては分からない。

もうあの夏の事など誰も覚えてはいない。

でも……、

それでも僕はあの出来事を語らなくてはいけない気がするんだ。

吸い込まれるような深い冷たい瞳を持った「あいつ」の事を……。

季節は夏。

じつとりとした汗の臭いが気になるこの季節。

僕は中学校、最後の夏休みを迎えようとしていた。

「おい！<sup>あまひ</sup>輝！」

後ろから鈴木の声が僕を呼び止めた。

「ああ、おはよう。」

普通に返すと肩を叩かれた。

「あのなあ、そりやないだろ？せめて朝くらいテンション上げろよ！」

鈴木は中学生になってからの親友だ。

冴えない僕をなぜか気に入ってくれた唯一の奴だ。

鈴木は別に特別かつこいいわけじゃないけど、気のいい奴で、話も

面白いし、何だかんだ言つて、クラスでも人気がある方だ。でも氣取つてゐる素振りにはこれっぽちもなく、そこが僕は好きだ。

それに比べて僕は一応勉強が出来るくらいで、そんなに皆の氣に止まるような特技もないし、

話すのも得意じゃないし、あえて言つなら、人の話を聞くのは得意なほうだけど。それに、

顔もいいわけじゃない。ブサイクってわけじゃないけど、かっこいいとは言えない。絶対に。

身長も極一般的だし。走りも速くない。まあ、氣にしないけど。

今日は夏休み一週間前。

蝉がうるさい。

今年の夏休みも暑くなりそうだ。

吸い込まれそうな青空を見上げてそんなことを思っていると鈴木にこずかれた。

「お前、人の話聞いてんのかよ？」

「ああ、ごめん。何の話だっけ？」

「どっから聞いてなかったんだよ？」

「・・・たぶん全部。」

「やっぱし？」

「ごめん。」

「まあ、いいけどさ。俺が話してたのは転校生の事。なんかうちのクラスに来るらしいんだけど、なんでまたこんな時期に転校かねえ。大変だよなあ。」

鈴木は頭の上で腕を組むとそう言った。

「でも、一週間来れば休みだし。いいんじゃないかなあ。」

「お前の感想には拍手を贈りたくなるよ。普通、氣になるところ違えだろ？」

「なんか問題でもあるっけ？」

鈴木は呆れたように首を振るところ言つた。

「一、男か女か。二、女だったら可愛い子か。この二つしかないだ

る!？」

ああ、そういうこと。

「別に興味ないし。」

「お前さあ、顔悪くないんだからその喋り方どうにかして服装も手え加えて、もうちょっと他 人のことも気にしようぜ。特に今年で中学最後の夏休み前だぜ？彼女くらい欲しくなるだ

ろ？」

「。。。。」

黙って空を見上げるしかなかった。

でも、転校生には少し興味があるかも。。。。

一体どんな子だろうか？

まあ、どうせ僕なんか言葉が交わすことはないだろうけど。それでも、やはり少し気になったまま教室に向かった。

夏は暑かった。

教室は暑苦しかった。

汗の臭いが気になった。

でも、

そんな教室が「あいつ」が入ってきた瞬間、僕は言いようのない冷たさと苦しみにも似た寂しさを感じた。

この日、僕は「あいつ」と出会った。

## あの日（後書き）

どうでしたでしょうか？

是非、ご意見・ご感想、お聞かせください。  
これからも頑張ります。

## 扉の前（前書き）

予定より長くなってしまいそうです・・・。  
まだまだ未熟ですが読んでいただけると嬉しいです。



## 扉の前

体が煮えて溶けてしまいなこの蒸し暑い空間。  
制服の袖を巻くりあげ、流れる汗を拭う。  
誰もがやる気を失っていた。

一瞬、僕は「あいつ」と目が合った……。  
体中が凍ってしまったかのようにだった。  
冷たい瞳。

夏の夜空をそのまま全て吸い込んでしまったかのような澄んだ瞳。  
肩のあたりで揃えてある茶色がかった髪。  
スラっとした体つき……。全てに。

彼女の存在全てに、存在そのものに僕は吸い込まれた。

転校生……。

夜空 ヨソラ 零 レイ

黒板に白く浮かび上がる文字。

担任が口を開いて初めて他の生徒の声が聞こえてきた。

「今日からこの学校に通うことになった夜空 零さんだ。」

こんな時期に大変だったとは思うが家庭の事情でこの地区に引越すことになった。

皆、宜しく頼むぞ。じゃ、零さん自己紹介を……。」

担任が口を閉じると皆、目だけ彼女の方へ向けた。

夜空 零が一步前へ踏み出した。

「夜空 零です。宜しく願います。」

それだけ言い終わるとゆっくりとお辞儀をし、元の位置に戻った。

「零さんの席は岸辺の、あの窓側の後ろから二番目の奴だ、の隣な。」

夜空 零は僕の斜め左前に静かに腰を下ろした。

僕は彼女の姿を信じられない気持ちで眺めていた。

こんなにも冷たく、美しい人がいるなんて知らなかった・・・

こんなにも哀しい瞳を持った人が存在するなんて・・・。

呆然と見つめているといると夜空　零が振り返り僕を見た。

慌てて視線を逸らそうとしたが出来なかった。

夜空　零は僕を見つめたまま囁くような声でこう言った。

「貴方も同じ・・・？」

それだけ言々と視線を外し、元の向きに戻った。

僕は固まったまま動けなかった。

「貴方も同じ・・・」？どうゆう意味だよ・・・。

こうして僕はあいつと出会った。

この日を境に僕を取り巻く世界が一変し始めた。

もう、僕はここから抜け出すことは出来ない。

それはこれから変わることは無いだろう。

一生。

## 扉の前（後書き）

読んでいただき有難うございます。

これからも頑張って書いていきますのでよろしく願います。  
ご意見・ご感想お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4454a/>

---

明日に祈る

2010年12月22日02時35分発行